

霞

— 2026年度春季展示室だより —

令和8年3月31日発行(通巻第66号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(66)

古写真「代かき」



大正7(1918)年の春先のひとコマ。田植えにむけて荒起こしをしたあと、田に水を入れて塊になっている土を砕き、平らにします。この作業を「代かき」とよび、馬^ま鋤とよばれる農具が使われました。馬鋤は馬や牛に縄でつないで引かせ、後につく人が鳥居状の取っ手を土に押し付けながら操作します。馬鋤の下部につく歯で土の塊を砕きながら、水田を均一にしていきます。【情報ライブラリー検索キーワード「代かき」】

目次

○古写真・絵葉書にみる土浦(66)	1
○博物館からのお知らせ	1
○仏堂にかかわる人々(古代・中世)	2
○新発見!土屋陳直の和歌(近世)	3
○土浦藩御用絵師の絵画修業(近世)	4
○城下町の日記にみる田植え準備(近世)	5
○天谷要平と農業の近代化(近代)	6
○市史編さんだより	7
○霞短信「台帳を書くという営み」	8
○コラム(66)	8
○情報ライブラリー更新状況	8

博物館からのお知らせ

★★企画展「土浦藩士の江戸・明治」★★

会期: 3月14日(土)~5月6日(水)
休館日: 月曜日(5月4日を除く)・3月24日(火)・4月30日(木)
江戸から明治にかけての土浦藩土屋家や土浦藩士たちに着目し、彼らの生き方から武士にとっての明治維新を考えます。

★★会期中のイベント★★

①記念講演会「華族土屋家の近代」

とき 4月11日(土)午後2時~3時30分
場所 博物館視聴覚ホール(定員45名)
講師 小寺 瑛広 さん(松戸市戸定歴史館研究員・昭和女子大学非常勤講師)
申込 電話または博物館ホームページのLoGoフォームより

②学芸員によるギャラリートーク

とき 3月20日(金)・4月29日(水)
午前10時~/午後2時~(いずれも30分程度)



土屋拳直肖像(当館所蔵)



博物館マスコット
亀城かめくん

仏堂にかかわる人々

ねじかきた がとう ぼくしょ
—根鹿北遺跡の瓦塔と墨書土器—

土浦市北部に位置する根鹿北遺跡(今泉)で出土した、木造堂塔のミニチュアである瓦塔・瓦堂がどう(図1)については、「瓦塔をまつる—古代の人々と仏堂—」(「霞」40号)として取り上げ、本来は仏堂に安置されていたことを述べました。この仏堂は平安時代(9世紀)のもので、張り出した台地の突端という特徴的な場所に建立され、後に火災で焼失してしまいました。遺跡内の竪穴建物跡の状況から、集落に暮らす人々の共有の建物とは考えられず、土地や財力を蓄えた有力者によって建立され、東国における平安時代の瓦塔・瓦堂をまつる信仰の高まりの中、社会的地位や身分を誇示する重要な意味を持ったものと思われます。

今回は根鹿北遺跡の瓦塔・瓦堂を安置した仏堂にかかわる人々の具体像を、仏堂跡の近辺で出土した特徴的な墨書土器から考えてみたいと思います。

墨書土器は墨で文字が書かれた土器で、墨を硯すずりで磨り、筆で書かれています。当時、文字を書くことは写経を行う僧や行政文書を扱う役人など、限られた人々が会得する技術でした。仏堂跡のすぐ南側の斜面に、仏堂の維持・管理に関わる竪穴建物跡(SI-39)が1軒発見され、「佛」と書かれた僧が托鉢たくはつにも使用する鉄鉢形土器てっぽつや「丈部真磨はせつかべの まろ」と書かれた土師器はじき かめの甕(図2)、そして、墨を磨るための硯も出土しました。これらの出土品から、当時の仏堂にかかわる僧や「丈部真磨」と名乗る人物の存在が浮かび上がります。

僧については、墨を磨り文字を書き、仏堂内の瓦塔・瓦堂を前に、供物を盛る鉄鉢形土器を供え、儀礼を行っていた様子がうかがえます。墨書土器「丈部真磨」については、墨で文字を消したような痕跡が残るもので、千葉県八千代市周辺地域で多く確認されている、「丈部」の氏名うじなが記された多文字墨書土器との類似性が指摘できます。

性が指摘できます。

また、根鹿北遺跡は仏堂が建立される以前から、土師器甕の生産とかかわりを持つ場所であったと考えられています。土師器甕に墨書していることを重視すると、その生産や経営で財をなし、仏堂を建立したのが「丈部」を名乗る有力者だったのかも知れません。(関口 満)



図1 瓦塔・瓦堂〔復元〕
(当館所蔵)

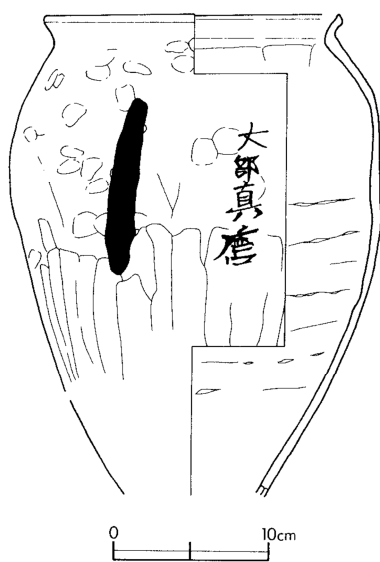


図2 墨書土器「丈部真磨」
(当館所蔵)



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。いずれも近世コーナーに展示しています。

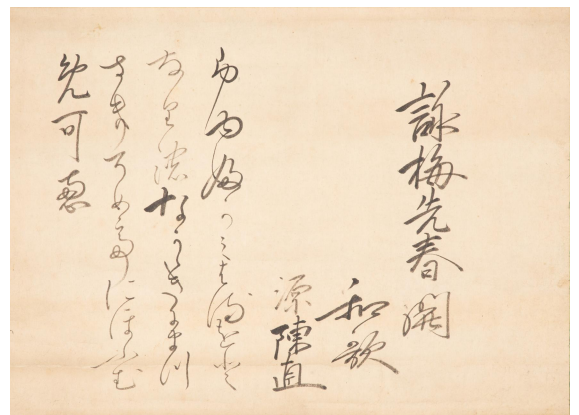
- 鉄鉢形土器(当館所蔵)
- 根鹿北遺跡の瓦塔・瓦堂(当館所蔵)



のぶなお
新発見！土屋陳直の和歌
 かいし
 —土屋陳直和歌懐紙—

令和7（2025）年、土浦藩主土屋陳直の詠んだ和歌が新たに発見されました（写真）。陳直は土浦藩土屋家の3代当主で、幕府で約30年間老中を務めた2代当主土屋政直まさなおの四男に生まれました。三人の兄が早世したため、享保4（1719）年5月28日に家督を継ぎましたが、同19年1月16日に40歳でこの世を去りました。

陳直は絵画や和歌などを遺しており、絵画の一部は当館で所蔵しています。眼光の鋭い「鷄図」や優雅な姿の「鷺図」、房や蔓を大胆に配置した「葡萄図」などがその一例です。しかし、陳直による和歌については、長らく所在不明でした。所在不明の和歌がなぜ実在したと分かるのかといえば、この和歌が土浦城内の櫓やぐらで保管されていたことを示す記録が現存するためです。江戸時代後期に作成された「土浦藩士書留」（当館所蔵）には、土屋家の歴代当主の遺品などが、城内の櫓に収められていたことが記録されています。このうち霊鷲院（陳直おくりな）のものは、前述の葡萄図を含む9点存在し、うち1点は「霊鷲院様御筆御自詠」（自ら詠んだ和歌／以下「御自詠」）であったと記録されています（表）。今回発見された和歌は、この「御自詠」である可能性が高いと考えられます。



土屋陳直和歌懐紙（当館所蔵）

詠梅先春開
 和歌
 源陳直
 ふゆふかしはるをと
 なりのなかゝきにまつ
 さきそめてにほむ
 めかえ
 【意訳】
 冬が深まる中、春が隣
 まで迫ってきたかのよ
 うな長垣に、真つ先に
 色を染めて香りを放つ
 梅の枝よ

土浦城の櫓に収められた土屋陳直の遺品

収蔵された長持の名称	保管品
御代々様御自筆御長持	霊鷲院様御筆 兎絵
	霊鷲院様御筆 惠美須
	霊鷲院様御筆 四皓
	霊鷲院様御筆 御自詠
	霊鷲院様御筆 御懐紙
	霊鷲院様御筆 団扇
	霊鷲院様御筆 松絵
	霊鷲院様御筆 御詠
	霊鷲院様御筆 葡萄

本表は「土浦藩士書留」（当館所蔵）を基に作成した。

それでは、なぜ「土浦藩士書留」に記された「御自詠」であると判断できるのでしょうか。今回発見された和歌は軸装されたうえで木箱に収められています。この木箱の蓋には、「霊鷲院様御自詠御筆」、「二箱之内、外一箱ハ八番懐紙」と記されていました。もう一度、表に目を移すと、「御自詠」のほかに「霊鷲院様御筆御懐紙」も記されていることが確認できます。これらの情報から、今回発見された和歌は、土浦城内の櫓で保管されていたと考えられます。

陳直の和歌は、冬の深まる中に咲き始めた梅の花に春を感じるというものです。長く所在不明であったこの和歌は、今回の春季展示が当館収蔵後初の公開です。新たに発見された土浦藩主の自筆の和歌とともに、展示室で春の訪れを感じてみるのはいかがでしょうか。（西口正隆）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。いずれも近世コーナーに展示しています。

- 土浦藩士書留（当館所蔵）
- 葡萄図（当館所蔵）



ごようえし 土浦藩御用絵師の絵画修業

とうすい しんぴんせい がたいしゅう
—岡部洞水「神品聖画大集」—

土浦藩御用絵師岡部家の3代当主洞水（愛敬・？～1850）は、江戸幕府御用絵師の一つである駿河台狩野家の5代当主洞白（愛信・1772～1821）に師事し、修業の末に師の画号と名の一字を得て洞水愛敬と称したとされます。その足跡にはいまだ不明な点が多く残る洞水ですが、当館が所蔵する「神品聖画大集」と題された資料は、彼が御用絵師となる以前、修業時代の画業を現在に伝えます。

本資料は、洞水臨写の古画など38点の作品が巻子に仕立てられたものです。南宋の宮廷画人李迪が描いた「紅白芙蓉図」（写真左・中央）をはじめ、同じく南宋の馬遠、夏珪、梁楷、銭選、日観、元の顔輝、月山、明の陸治のほか、雪舟や勝田竹翁など、中国や日本の画人の作品が臨写、収録されています。

作品の中には、臨写された時期や日付が明記されているものがあります（写真右）。このうち年次が明らかなのは15点で、寛政11（1799）年から享和3（1803）年までの間に描かれています。

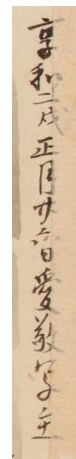
土浦藩の藩士録「諸士年譜」によると、洞水は享和2（1802）年6月朔日に「御徒格御絵師見習」となり、2人扶持と江戸滞在中の修業料として金3両を与えられ、文化元（1804）年7月に岡部家の当主となっています。享和2年時点で洞水は江戸で絵画修業中であったことがわかります。

江戸幕府奥絵師の一つである木挽町狩野家の絵画修業では、徹底した古画の臨写が行われ、卒業までに10年以上の年月を要したとされます。駿河台狩野家でも10年近い修業が行われたようです。「神品聖画大集」に収録された享和2年前後の作品は、彼が家督相続以前、江戸で修業に明け暮れた若き洞水によって描かれたものだったのです。

（井上 翼）



神品聖画大集（部分・当館所蔵）



享和二年正月廿六日 愛敬写主

参考文献

土浦市立博物館編・刊『土浦藩絵師 岡部洞水 知られざる狩野派の画人』（2002年）
堀部猛「岡部洞水筆『古画模本画卷』について」（『土浦市立博物館紀要』第32号、2022年）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。いずれも近世コーナーに展示しています。

- 縮図 岡部永知（個人所蔵）
- 縮図 広瀬知浩（個人所蔵）



城下町の日記にみる田植え準備

— 色川家の日記から —

国学者の色川三中は、土浦城下の田宿町（現大手町）で薬種業、川口町（現中央一丁目）で醤油蔵の経営に携わりました。このうち田宿町の薬店で、三中とその跡を継いだ弟美年が30年以上にわたり書き残した日記が「家事志」・「家事記」です。商売に関する記録はもちろん、家族や奉公人のこと、近所づきあい、町の出来事と風聞などが書き留められ、町の暮らしを知る上で、たいへん貴重な記録になっています。

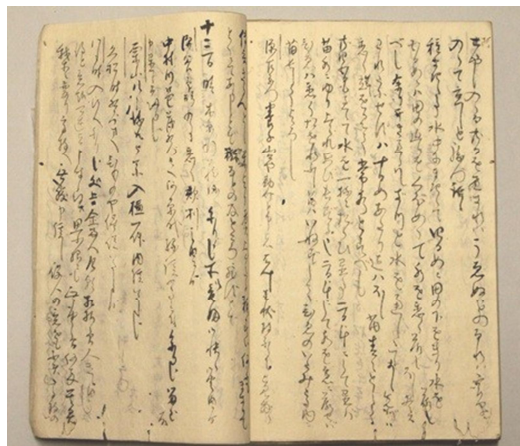
城下町というと、商家や旅籠などが軒を連ねて店を構え、商人・職人の住むイメージが先行しますが、色川家では町の周辺にいくつかの農地をもち、小作人にこれらを耕作させていました。そのため、日記には農作業の記述も散見されます。今回は文政12（1829）年の春の田植えの準備をご紹介します。

この年は3月17日に苗代へ種を蒔きました。4月12日条には、「八日かびたうなひ終ひ申候」とみえます。「かび田うない」とは前年の稲株の残る田んぼを起こすこと、すなわち最初の耕起作業で、これを4月8日までに終えたことが分かります。同12日条には、この日は種を蒔いてから26日目にあたることも記されています。そして、54～55日目に田植えを行うとして、種まきから田植えまでの苗代の管理について、具体的に書き留めています。以下、長文となりますが、引用をしてみましょう。

種まき候事、水中にまき候て、四日めニ田の下をきり水を落し、五日めニハ田の廻りをくぼめ候て水を悉く落し、ほし尽すべし、余り干き過候ハ、ざつと水を通し候てよし、先づハわれたにせずハ十日めあたり迄ハほし、苗青々として悉く立を見て常水とすべし、廿四五日も過候て水を一杯にたゝひ置事二日計ニして置バ、苗水にゆり上られ延び長ずる也、二日計ニして水を急に落せばひ急は悉くたをれふし、苗ハいねずしてひ急のいたみたる内ニ苗長してよろし

水をはった苗代に種を蒔きますが、4日目に水を落とし、5日目には苗代の周囲を掘りくぼめて完全に水を落としました。乾し過ぎてしまったときは、ざつと水を通して、地面が割れないようにします。10日目あたりまで干すと、苗が青々と育ってくるので、再び水を入れて常水にします。24～25日目を過ぎたあたりで、2日間ほど水をいっぱい湛えておくと、苗は水に揺り上げられながら大きく成長します。さらに2日ほどして水を急に落とすと、雑草の稗はことごとく倒れる一方、苗は倒れることなく成長していきました。

育てた苗は5月7日から植え初め、1ヶ月以上田植えが続きました。6月9日には「田植仕舞為祝儀さめ調ひ申候」とあり、田植えが終った祝いに「さめ」を用意したと記されていました。はて、「さめ」とは？翌文政13年4月29日の日記をみると、植え初めの祝いに星鮫を1本買ったとの記録がありました。どうやら田植えの前後に鮫を食していたようですね。（萩谷良太）



「家事志」巻三の文政12年4月12日条
（当館所蔵、茨城県指定文化財）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 土浦の伝統稲作 映像（情報ライブラリーで公開）
- 土浦地方の農具（当館所蔵、近代コーナーに展示）



あまがいようへい

天谷要平と農業の近代化

きだまり こうらせいり
—木田余の耕地整理—

常磐線土浦駅じょうばんせんを水戸方面に出発して間もなく、霞ヶ浦側の車窓から一面に広がる蓮田はすだを眼にすることができます。土浦市木田余地内にあたるこの蓮田の一角は、土浦市域でもっとも早く耕地整理が進められた場所で、蓮田になる以前は稲作が行われていました。今回はこの地の耕地整理に携わった人物のひとりで、農業の近代化に取り組んだ天谷要平についてご紹介します。

天谷要平は、天保14（1843）年に木田余村に生まれ、8歳のときに学問を志して宝積寺ほうしゃくじ（市内木田余）で学びました。病弱なため稲刈りの最中に倒れたこともあったようですが、農業の研究に熱心に取り組んだ青年でした。明治21（1888）年、新治郡役所で開催された農事講習会に参加し、茨城県の農事教師であった織田又太郎くんとうに学びました。織田の薫陶を受けた講習会の参加者たちは、同23年に「茨城農会」を発足させますが、要平も新治郡の評議員としてこれに参加しています。

その後、要平は茨城県の農事改良委員となり、木田余地内で「水田二毛作試験にもうさく」に取り組みました。二毛作、つまり1年間に同じ耕地で春から秋に稲を、秋から春に麦をつくることは、当時の土浦ではほとんど行われていませんでした。要平は、木田余地内の水田1反歩（約991.74㎡）を利用して11月に麦を蒔きました。翌年5月には収穫に至り、在来の畑で栽培したものより光沢が良く、粒が大きい麦がとれるなど良好な結果を得ました。続いて稲を育てるため、麦の刈入れを終えた耕地を耕して水を引き、馬を使って代かきをしました。そして、6月20日に移植（田植え）を行い、9月29日に稲刈りをしました。他の水田の同種よりも7日も早く収穫できたうえ、それなりの収量があり、米の質も最上であったと記録されています。こうして、要平の二毛作試験は成功を収めました。

明治35～36年度には、茨城県農事試験場が麦作改良のために在来法と改良法との比較試験を行いました。新治郡では要平が担当者となり、塩水による撰種せんしゆをしたり、肥料の配合や量の割合を変えることで、これまでのやり方（在来法）とどのような違いがでるのかを実験しています。

こうした要平の先進的な取り組みを通して、最新の農業技術と知識が、木田余の農家にも共有されていったと推測されます。そして、明治39年に木田余地区は施行認可を受けて、周辺農村にさきがけて耕地整理に取り組み、大正5（1916）年に完成しました。戦後にアメリカ軍が撮影した航空写真をみると、木田余地区には美田が広がっていたことを確認することができます。耕地整理により乾田化が実現し、水田が規格化されたことで作業効率が高まりました。要平が耕地整理をはじめ農業の発展において重要な役割を果たしたことが、宝積寺に残る彼の顕彰碑に刻まれています。（萩谷良太）



耕地整理が行われた木田余地区の水田（写真の左側） [地理院地図：昭和24年のアメリカ軍撮影空中写真に加筆]



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 土浦地方の農具（当館所蔵、近代コーナーに展示）
- 土浦の伝統稲作 映像（情報ライブラリーで公開）



市史編さんだより

春に新しい帽章を（明治～大正の洋品店の様子）

4月は新しい学年になり、制服や学用品を新調する季節です。保護者や子どもたちにとって華やいだ季節ですが、それらを準備する洋品店にとってもかき入れ時です。

今回は学生帽や校章などを取り扱っていた土浦洋物商組合の帳簿類から、明治から大正にかけての様子をみていきましょう。土浦洋物商組合は明治34（1901）年2月に霞月楼で発会式を行いました。当初は土浦の12店で発足したと考えられます。大正15（1926）年には25周年を迎え、16店が所属していました。そのうち発足時から健在だった3名が組合から表彰されています。構成している商店は入れ替わりながら、また世代交代をしながら組合は25年間存続したということになります。組合の帳簿として明治34年から大正11年までの「金銭出納帳」や大正12年から15年までの「組合貯金集金帳」、明治37年から42年までの「土高徽章受払控」（「徽章」とは身分・職業などを表すため帽子や衣服につけるしるし）、明治42年から大正11年までの「土浦中学・高等・尋常帽章配分帳」が断続的に残っています。

これらの帳簿類をみると、明治34年の組合結成当初は、組合で扱う品目は競り売りの鞆や帽子などでしたが、明治37年から学校の帽章などを扱うようになりました。土浦高等小学校の徽章、尋常小学校・高等小学校の帽章です。明治39年には襟章に使う1～5の数字や中学校の徽章も扱い始め、明治40年には帽子の耳釦、大正10年には靴べらも取り扱うようになりました。大正10年には鷹匠町にあった常総学院（現在の学校とは別）の帽章や運動帽も加わりました。

大正時代の「配分帳」には、形も色もさまざまな各店の商品の受取印が押されています（写真）。受取印には商店の住所や取扱品名が明記されているものもあり、商店自体の具体的な様相を想像することができます。同じ商店でも別のデザインの押印を作っている場合もあります。領収証などでも同様の商店印を見かけます。領収証を組合とのやりとりでも使っていたと考えられます。帳簿類には品名と扱った商店の名前が整然と並んでいるのですが、学校の徽章、帽章、襟章、耳釦、運動帽などそれを付けて通学している学生の姿も目に浮かびます。

（市史編さん係会計年度任用職員 江島万利子）

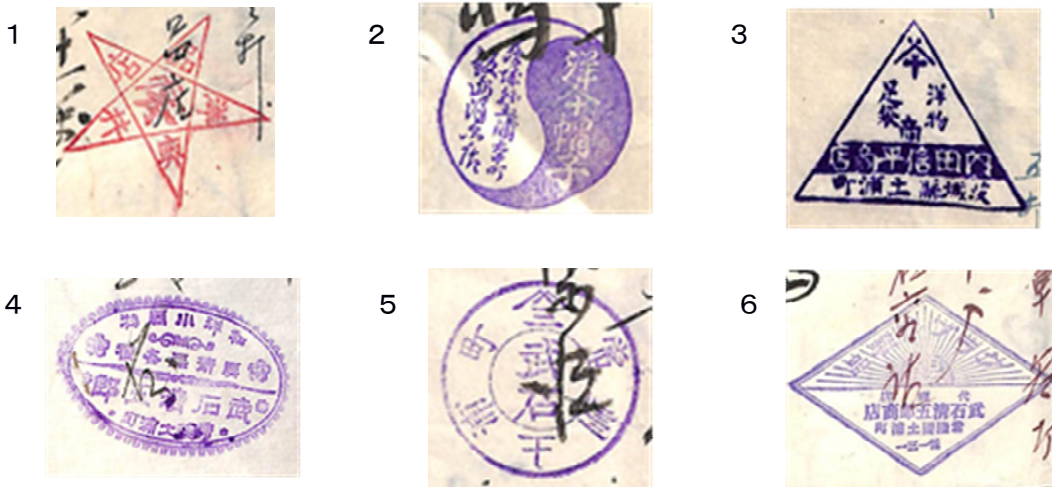


写真1～3：デザインが目を引く押印。左から順に、奥井商店・飯島洋品店・内田信平商店。

写真4～6：デザインが変わっていく武石清五郎商店の押印。同店の帳簿で使われていたもので、左から順に、明治43～大正元年、大正元年～同4年、大正2年～同11年のものです。

霞 短信

Kasumi-tansin

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、本年3月まで博物館で勤務し、民俗資料の台帳作成や校外学習を担当して下さっている、会計年度任用職員^{とうあ}の関口東亜さんにご寄稿いただきました。

台帳を書くという営み

博物館には様々なモノが集まります。そのどれもがかつての人々の営みを今に伝える“資料”です。令和6年から8年まで私は学芸補助として、民俗資料の整理に伴う台帳作成を担当し、博物館の資料を管理するお手伝いをして参りました。

博物館に寄贈・寄託などにより収集された資料の多くは“資料台帳”に登録され、収蔵庫に収蔵されます。学芸補助の業務内容の多くは、この台帳の作成に充てられます。

台帳には資料名やその用途、使用年代など資料にまつわる様々な情報が記録されます。学芸補助はそれらの情報を出来る限り詳しく記述できるよう、収集時の聞き取りに加えて、様々な参考文献や参考映像と照らし合わせながら作成に臨みます。

特に民具などの民俗資料の中には、似通った特徴と複雑な機能を持つ資料も多いため、外観の撮影に加えてスケッチを行うことで、写真からは見えにくい構造や文字・傷等の情報を拾い上げて、類似する資料と区別できるようにする工程も台帳作成の上で大変重要な作業です。

このようにして書き上げられた資料台帳は、所定の棚に保管されます。郷土資料館時代から現在に至るまで、博物館に集められた多くの資料と同じだけ台帳があるわけですから、その数は膨大です。私は時折、先輩方の残した分厚い台帳の束から一枚を取り出して眺めてみるのですが、当然のことながら台帳が書かれた時期によって作成者が異なり、筆跡やスケッチの描き方も各々の特徴があります。

地層のように重なった台帳の束こそ、歴代の学芸員と学芸補助、そして土浦市立博物館の営みを今に伝える“資料”なのです。そして、その中に自分の書いた僅かばかりの台帳が残されることが、私の秘かな誇りです。
(会計年度任用職員 関口東亜)

コラム (66) 「お世話になりました」

年月が過ぎるのは早いもので、土浦市立博物館に赴任してから8回目の春を迎えました。私事ではございますが、令和7年度末をもって退職をいたします。短い間ではございましたが、多くの皆様にご教示・ご助力をいただきました。この場をお借りして、深く御礼を申し上げます。

8年間という短い間ではありましたが、様々なことを経験させていただきました。博物館学芸員としての業務のみならず、当然ながら市職員としての業務も担当してきました。慣れないこと、誰もやって来なかったことに取り組むことも多く、自身の未熟さを実感し、辛い思いをしました。しかし振り返ると、着実に前進してきたことを実感します。

4月からは、東京都立川市にあります国文学研究資料館に移ります。学芸員という立場から准教授に変わるため不安もありますが、土屋家文書をはじめ新天地の収蔵資料を活かして研究に邁進いたします。

働く環境が変わっても、私の研究フィールドの一つは土浦です。今後も市立博物館の資料を活用し、土浦市の歴史・文化の研究に貢献してまいります。
(西口正隆)

情報ライブラリー更新状況

【2026・3・31現在の登録数】

古写真 606点(+0)
絵葉書 514点(+0)

※()内は2026年1月6日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を随時追加・更新しております。1ページで紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2026年度

春季展示室だより(通巻第66号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/tsuchiurashiritsuhakubutsukan/index.html>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2026年度春季展示は、2026年3月31日(火)~6月28日(日)となります。「霞」2026年度夏季展示室だより(通巻第67号)は2026年6月30日(火)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。